

## 「テレタビーズ」の魅力と昔話

### 子どもにとっての面白さ

美濃部 京子

#### Why the “Teletubbies” Attracts Children: Its Folk-tale Aspects

MINOBE, Kyoko

#### 1. はじめに

「テレタビーズ」とは、イギリス BBC が制作する幼児 (0 ~ 4 才) 向けの番組であるが、1999 年 4 月より日本でも放映が始まり<sup>1</sup>、人気を集めている。制作者のアン・ウッド (Anne Wood) とアンドリュー・ダベンポート (Andrew Davenport) は制作に先立って、子どもたちの行動や反応を観察し、子どもたちが何を喜ぶのかをよく知った上で制作に当たっているとされているが、番組の構成をみていると昔話の語りと共通する特徴がいくつかみられる。もちろん、番組は CG など最新技術も用いた映像であるし、基本的に耳で聞いて楽しむ昔話とは性質が異なっている。しかし、話の設定の仕方や進め方に共通点がいくつか見られる。制作に当たって昔話の特徴を意識していたかどうかは明らかでないが、子どもが喜ぶ昔話と番組に共通点がみられるのは興味深いことである。

本論では、テレビ番組「テレタビーズ」と昔話の共通点を比較してみたい。それによって、「テレタビーズ」がどうして子どもに人気があるのか、また、昔話のどういうところを特に幼い子どもたちが喜ぶのかが明らかになるだろう。

ところで、本論にはいる前に番組の紹介を簡単にしておきたい。テレタビーズとはテクニカル・ベイビーであると言われているが、「テレビ」と「タビー」(ずんぐりしたもの)を合わせて作られた合成語である。ティンキー・ウィンキー (Tinky Winky)、ディプシー (Dipsy)、ラーラ (Laa-Laa)、ポー (Po) の 4 人のテレタビーたちはテレタビーランドに住んでいて、4 人いつも仲良く暮らしている。テレタビーランドにはウサギが住み、赤ちゃんの顔をしたベビー・サンが輝いている。テレタビーズが住む家 (タビトロニック・スーパードーム) には掃除機のヌーヌー (Noo-noo) も一緒に暮らしている。4 人の頭にはそれぞれ形の異なるアンテナがついてい

て、お腹にはテレビ画面がついている。4人はこのテレビ画面を通して、人間の子もたちの様子を知ることができるようになっている。テレタビーランドにはときどき遠くからいろいろなものが現れて、4人を楽しませてくれる。風車が回ると何かが起こる合図である。また、ときどき地面からボイストランペットが現れ、場面に応じた歌や音、フレーズなどを聞かせてくれる。

## 2. お話の世界へ 語り始めの言葉と語り納めの言葉

「むかしむかしあるところに」など、昔話は特有の語り始めの言葉(発端の句)で始まり、「めでたしめでたし」など決まった語り納めの言葉(結句)で終わるのが普通である。アクセル・オルリク(Axel Olrik)は、口承説話は突然始まったり突然終わることはないとして、「語り始めの法則(Law of Opening)」「語り終わりの法則(Law of Closing)」をあげている(Olrik、131-132)。昔話はちょうどこの語り始めと語り納めの言葉にはさまれており、この間は現実の世界ではない不思議なことが起こる世界なのである<sup>2</sup>。

昔話の語り始めの言葉としては、日本では「昔あるところに」「むかしむかし」「とんとむかし」などがよく知られているが、ヨーロッパでは「むかしあるとき」の他「昔アーサー王が国を治めていたころ」「昔ミルクの川が流れていたころ」などというのものもある。いつどこのことかわからないけれど、この世界ではないところで起こる話であることを宣言し、そこから日常の世界とは違う昔話の世界が始まることを聞き手に印象づけるのである。

一方、「テレタビーズ」では2種類の語り始めの言葉が使われている。番組の始まりと、各エピソードの始まりである。

番組の始まりは「おかのむこうのそのまたむこう、テレタビーズのいるところ(Over the hills and far away, Teletubbies come to play.)」というナレーションで始まり<sup>3</sup>、昔話の場合と同じように、テレタビーズのお話は、現実の世界ではないどこか遠くの話であることを語っている。ただし、「テレタビーズ」の場合は「むかし」のことではなく、テクノロジーに囲まれた現代のあるところである。この最初の言葉によって、子どもたちは現実の世界を離れ、現実には起こり得ないような不思議なことが起こるかもしれない世界に自然に入っていくことができる。

各エピソードの始まりの言葉も決まっていて、毎回必ず「ある日テレタビーランドで(One day in Teletubbyland...)」で始まる。いつも舞台はテレタビーランドで、テレタビーズの4人、あるいはそのうちの何人が何かをしているところで始まるか、何かが遠くからやってくる(Something appeared from far away)ところから始まる。いつも決まった同じ形で始まるので、子どもたちはいつもと違う新しい部分に注目し、そのエピソードでは何が中心になっていくのかがすぐにわかる。昔話でも発端の句に続いてこれから話の中心になる主人公のことが述べられるのが普通である。

昔話の語り終わりは、日本では「おしまい」などの簡単なもののほか「どっとはらい」「いちごさかえた」「むかしこっぶり」など様々な形式句が見られる。ヨーロッパの方でも「それからふたりはずっと幸せに暮らしました」というおなじみのもののほかに「ふたりはまだ死んでいなければ、今でも生きています」などが知られている。どれも、これでお話が終わったということ

を宣言し、聞き手を現実の世界に引き戻す効果がある。そして、話の終わりはほとんどの場合がハッピーエンドである。

「テレタビーズ」の方では、各エピソードの終わりはいつも「テレタビーズはおともだちが大好きです (Teletubbies love each other very much)」という言葉とともに4人(時にはヌーヌーも含めて5人)で抱き合い、「なかよし (Big Hug!)」で終わるのが普通である。この「おともだち」のところにはテレタビーズの個人名が入ることもある。これによって、子どもたちはいろいろあったけれどもやはり4人はなかよしなんだという安心感でお話を見終わることができる。昔話が「それからずっと幸せに暮らしました」とハッピーエンドで終わっているのと同じである。

また、番組の終わりも毎回決まった形で終わる。ボイストランペットが地面から現れて「タビバイバイの時間 (Time for Tubby Bye-bye)」を告げると、4人がそれぞれバイバイ・ゲームをしてドームに消えていく。そして「おひさまがしずみます。さようなら、テレタビーズ (The sun is setting in the sky, Teletubbies say good bye)」というナレーションとともに番組が終わる。これで、子どもたちは名残惜しいけれど、番組が終わることを実感できる仕掛けである。

このように、「テレタビーズ」のテレビ番組は、その番組全体もエピソードも昔話と同じように語り始めと語り納めの形式の枠にはさまれていて、現実の世界とは隔離された世界を確立している。したがって、それを見る子どもたちは、この番組を見ている間は番組の中に入り込むことができ、また、現実とかげ離れたことがそこで起こっても、当然のこととして見るのであり得るのである。

### 3. 「もっかい、もっかい」 くり返しの面白さ

ボイストランペットが歌を聞かせてくれたときや、お腹のテレビで現実の子どもたちの様子を見たときなど、テレタビーズたちは番組の中で何度も「もっかい、もっかい (Again, again!)」をくり返す。特に、子どもたちの様子を映すビデオがくり返されるのを見ると、子どもの性質をよく知らない人であれば、どうして同じビデオを2回もくり返して流すのか、番組制作の手抜きではないのかと感じる人も多いようである。しかし、幼い子どもが面白いお話や表現を耳にしたとき、「もう一回、もう一回」と同じものを何度も聞きたがる(見たがる)のはごく自然な反応である。制作者のアン・ウッドは「テレタビーズは子どもたち自身」であると言っているが(テレビ東京『テレタビーズってなに』所収のインタビュー)、子どもたちと同じように面白い映像を見たあとテレタビーズたちは「もっかい」をくり返して、同じ映像を見たがる。テレタビーズたちのお腹のテレビは「テレビの世界と現実の世界をつなぐもの」であるとアンドリュー・ダヴェンポートが言うように(『テレタビーズってなに』)、お腹のテレビを通してテレタビーズたちは現実の子どもたちの生活を目にする。子どもたちがテレビを通してテレタビーズの話を楽しむのと同じように、テレタビーズたちも現実世界の子どもたちの日常に興味を持っているのである。これによって子どもたちは、テレタビーズたちを身近に感じるとともに、自分たちの日常生活も楽しくすばらしいものであることを実感することができる。

このくり返しについて、アン・ウッドは子どもたちは大人とは違ったやり方で世界を感じており、理解するためには、くり返し見聞きする必要があると述べている。(BBC ホームページ) また、くり返しによって子どもたちは予期する時間が与えられるが、これが子どもの思考能力を高めるためには欠かせないのだという。(ビデオ添付のパンフレットより)

一方、くり返しは昔話にとっても欠かせない要素である。オルリクも「くり返しの法則 (Law of Repetition)」を口承説話の法則のひとつにあげ、物語の緊張を高めるとともに、物語を構成するのに欠かせない要素であるとしている (Olrik, 132-133)

昔話におけるくり返しは、複数の話にわたって現れるものと、ひとつの話の中に現れるものがある。前者は定型句のようなもので、前述の語り始め・語り納めの言葉などもこれに当たる。お話の中でおなじみのフレーズを聴くことによって、自然にお話の世界に入り込むことができるのである。後者は同じ話の中で、同じ言葉やフレーズ、モチーフ、出来事などがくり返されるもので、聞き手は言葉の響きを楽しむとともに、物語の展開にハラハラドキドキしながら話を聞くことができるのである。

### 3.1 既知のものに出会う楽しみ

小澤俊夫は、人間は既に知っていることに再び出くわすことに特別な愛着を感じ、再会の体験は人間の精神の安定にとってきわめて重要なことだと考えており、昔話にくり返しが強く現れるのはこうした人間の精神の要求するところなのだとして述べている (小澤、1997、72-73)。この再会の喜びは物語の中のくり返しだけでなく、いくつかの物語にわたって見られるおきまりの言葉やエピソードにも当てはまることである。

「テラビーズ」にはそうしたおきまりのエピソードがいくつか登場する。番組の中にコンピュータ・グラフィックス (CG) を用いた場面がでてくるコーナーがある。ここででてくるのはいくつかのバリエーションが決まっていて、クマのダンス、アニマルパレード、3艘の船、家の窓で歌う人、木と鳥の5種類である。またそれとはほかにライオンとクマ、(日本ではまだ放映されていないが) ヒツジを探す小さなボーピーブちゃん (Little Bo Peep) がテラビーズランドに現れて、寸劇 (rhyming pantomime) を披露することもある。こうした不思議な出来事が起こる前には必ずテラビーズランドの不思議な風車が回り、これから何かが起こることを知らせてくれる。風車が回ると、テラビーズたちは何をしても放り出して、丘の上に集まって喜んで見物するのだが、これはテレビを見ている子どもたちも同じ気持ちである。風車が回るとこれから何かが起こるといことがわかっているので、「今日は何が起こるのだろう」と期待に胸を膨らませる。そして、その内容にはいくつかのパターンが決まっているので、出てくると「今日はこれだった」という安心感を感じ、それでもCGを使った興味深い映像に見入るのである。そしてそこには子どもたちと同じように興味津々でその映像(寸劇)を眺めているテラビーズたちがいることで、子どもたちはよけいに親近感を感じるのだろう。

これは風車だけでなくボイストランペットにもいえることである。ボイストランペットが出てくると、必ず何かを聞かせてくれると決まっているので、今日は何を聞かせてくれるのだろうと

子どもたちは耳を澄ませる。これはボイストランペットが出てくると思わず駆け寄って耳を澄ませるテレタビーズたちと同じなのである。

その他、テレタビーズランドに遠くから様々なものが現れるが、それらは、鏡やじょうろ、椅子など、子どもたちの日常生活でおなじみのものばかりである。また、エピソードの中には子どもたちにおなじみのナーサリーライムを用いたものも少なくない。こうしたものもやはり既知のものに出会う喜びを子どもたちに与えてくれるのだろう。

### 3.2 3回のくり返しと最後部優先の法則

もちろん、くり返しはひとつのエピソードの中でもよく使われる。昔話においては、特に3回のくり返しが好まれ、オルリクは「3の法則 (Law of Three)」と呼んでいる (Olrik, 133)。また、昔話の様式について述べたマックス・リュティ (Max Lüthi) は、昔話は固定した公式で活動し、数字 1、2、3、7、12 を好むが、中でも3が支配的であり、この公式的な同じ数のくり返しの傾向が、昔話に固定した表情を与えるのに非常に役立っていると言う。さらに、昔話は同じことが起きたら、同じ言葉でくり返すことが重要なのであり、それは無能力ゆえではなく、様式上の要求からそうするのだと述べている。(Lüthi, 1969, 59-60) すなわち、昔話は抽象的様式を持っているが、くり返しもその様式のひとつだというのである。また、Lüthi は、このくり返しには「対極化」と「高揚 = クレッシュェンド」が伴う場合が多いことを指摘している (Lüthi, 1985, 188-189)。すなわち、くり返しが3回あった場合、全く同じように3回くり返されるのではなく、1、2回目と3回目の展開が違っていたり、くり返しされるにしたがって、その内容が難しくなったり、長さが長くなったりすることがある。このことは、Olrik は「最前部と最後部の強調 (Importance of Initial and Final Position)」という言葉で表しているが、たとえば、3人兄弟が登場する昔話では、最初に出発するのは長男であるが、最後に成功するのは最後に出発する一番下の弟であることが多い (Olrik, 136-137)。これは、「最後部優先の法則」として知られている。

「テレタビーズ」でも、このような最後部優先の法則を伴う3回のくり返しを含むエピソードがよく見られる。たとえば、「#19 ラーラのボール」というエピソードがある。

ラーラがお気に入りのボールで遊んでいるうちに、ボールが木の枝にひっかかってしまう。ラーラは手を伸ばしてボールをとろうとするが、背が低いので届かない。そこへラーラより背の高いディブシーが来たので、ボールをとってくれるように頼むが、ディブシーにも届かない。次に4人の中で一番背の高いティンキー・ウィンキーがやって来たので、ボールをとってくれるように頼むが、ティンキー・ウィンキーにも届かない。困っていると、そこへ4人の中で一番背の低いポーがやって来る。事情を聞いたポーはティンキー・ウィンキーのバッグをもぎ取り、木の枝のボールめがけて投げつける。バッグはうまくボールに当たり、ボールをとることができる。(テレビ愛知、1999年8月6日放送)

1回目のディブシー、2回目のティンキー・ウィンキーとだんだん背が高くなっているがボールを取ることができない。けれども、3回目に一番背の低いポーがほかのふたりとは違う方法で

うまくボールを取ることができるという話である。ここでは、1回目、2回目と「クレッシェンド」になっていて、3回目だけがほかと違う「対極化」および、「最後部優先」の特徴が現れている。このようにほかのテラビーズたちが成功しなかったことを、一番小さいポーだけが成功させる話がよくある。これは、昔話でも3人兄弟がいた場合はたいてい一番力の弱い3番目の弟が成功するのと同じように、一見力がないように見えるポーだけが成功することで、話をより面白くしている。

Lüthi は昔話の様式として、「極端なもの」「特に極端な対象を好む」(Lüthi, 1969, 62) と言うが、昔話ではたいてい社会の最下層にいる貧しい人たちが主人公になり、その主人公が最後には社会の一番上で君臨している王様にまでなることが語られる。貧しい人たちの中でも、一番怠け者で、常にほかのものからは馬鹿にされている一番年下のものが主人公になることで、そのコントラストをよりはっきりしたものとしているのである。

「テラビーズ」の中からもうひとつ例を挙げてみよう。ナーサリー・ライムの「小さいマフエットちゃん (Little Miss Muffet)」を下敷きにしたエピソード、「#21 クモがやってきた」である。

テラビーズランドにクモが現れる。ボイストランペットは「小さいマフエットちゃん」の歌を聞かせてくれる。「小さなマフエットちゃん、丘の上に座った。(Little Miss Muffet sat on a tuffet)<sup>4</sup> / ヨーグルトを食べていた。(Eating her curds and whey) / そこへクモがやってきて (There came a big spider) / 横に座り (Who sat down beside her) / マフエットちゃんは逃げていった (And frightened Miss Muffet away)」テラビーズたちは好物のタビーカスタードをもって、丘に出てきて、この歌と同じようにしてみせる。まず、最初にラーラがひとりで現れる。ボイストランペットの声に続いて、「小さなラーラちゃん、丘に座って、タビーカスタードを食べていた (Little Miss Laa-laa sat on a tuffet, eating tubby custard)」と言うと丘に座ってタビーカスタードを食べようとする。そこへクモが現れ、歌の後半を聞くと「逃げろ (Run away!)」と言って逃げてしまう。その次にティンキー・ウィンキーとディブシーがふたりで現れ、ラーラと同じように歌を口ずさみ、現れたクモに逃げていく。ところが、3番目に現れたポーは歌の後半を聞いたところで「ポーがクモを驚かす (Po frightened the spider away)」と言って、反対にクモを撃退してしまう。(テレビ愛知、1999年8月16日放送)

ここでは、まず、歌に沿って話が展開される。昔話でも予言や助言など最初に言葉で表されたことを、実際に主人公が行動で同じことを行うことがよくあるが、これも言葉を行動で同じようにくり返すというくり返しのひとつである。実際の行動のところでは、まずラーラがひとりで現れたあと、ティンキー・ウィンキーとディブシーが2人ひと組で現れ、次のポーでちょうど3回のくり返しになるようになっている。ここでも最後に力を発揮するのは一番小さいポーなのである。

それとは対照的に同じ3回のくり返しでも、ティンキー・ウィンキーが最後に来るときはひとりだけ失敗してしまうことも多い。「#54 てをつなごう」に出てくるエピソードがそれである。

テラビーズの4人はタビーカスタードを食べることにするが、最初に入れたポーがタビーカ

スタードを床にこぼしてしまう。次に入れたラーラとその次のディプシーはうまく床にこぼれたタビーカスタードを避けて席に着くことができるが、最後のティンキー・ウィンキーだけは床のタビーカスタードを踏んで滑ってしまい、外まで出てひと回りしてきてしまう。(テレビ愛知、1999年10月9日放送)

これも登場するのは4人だが、ひとりが床にタビーカスタードをこぼし、あとの3人がそれを踏まずに席に着けるかどうかという3回のくり返しになっている。ここでは3回目に出てくるのは一番大きいティンキー・ウィンキーなのだが、一番大きくてうまくできそうなものが失敗してしまうコントラストに面白さがある。

### 3.2 累積譚の面白さ

さて、これまで、くり返しの要素について述べてきたわけだが、昔話の中にはほとんどくり返しだけで成り立っているような話もある。これは、話の内容よりもその形式に特徴があり、言葉づかひや語り方の面白さで聞き手の興味をひく「形式譚 (formula tales)」と呼ばれる一群の話に含まれるものである。形式譚には「累積譚 (cumulative tales)」「引っかけ話 (catch tales)」「尻切れ話 (unfinished tales)」「果てなし話 (endless tales)」などがあるが、複雑な内容の話がまだよく理解できない幼い子どもたちでも、これらの形式譚には興味を示すようである。ブリッグズ (Katharine Mary Briggs) は昔話を5つのジャンルに分類しているが、その中に特に幼い子ども向けの話として「ナーサリーテイル (Nursery tales)」というジャンルを設けている<sup>5</sup>。その中には形式譚のほかナンセンスな話や怖い話など57話が収められているが、そのうち約3分の1の17話が累積譚である (Briggs, pt.1, vol.2, pp. 511-580)。累積譚というのは積み重ね話と呼ばれることもあるが、登場人物や行為が次々と連続して積み重ねられながらくり返される話で、イギリスの話では「ジャックの建てた家 (This is the House That Jack Built)」「おばあさんと子豚 (The Old Woman and her Pig)」「ヘニー・ペニー (Henny-Penny)」などがよく知られている。

「ジャックの建てた家」は「これはジャックの建てた家」で始まり、「これはジャックの建てた家にあった麦芽 (This is the malt that lay in the house that Jack built.)」という風にだんだん長くなっていき、最終連は「これはジャックの建てた家にあった麦芽を食べたネズミを殺した猫をいじめた犬を突き上げたねじれた角の雌牛の乳をしぼった身よりのない娘にキスしたぼろを着た男を結婚させたつるつる頭の坊さんを起こした早起きの雄鶏を飼っている麦の種をまくお百姓 (This is the farmer sowing his corn, that kept the cock that crowed in the morn, that waked the priest all shaven and shorn, that married the man all tattered and torn, that kissed the maiden all forlorn, that milked the cow with the crumpled horn, that tossed the dog, that worried the cat, that killed the rat, that ate the malt that lay in the house that Jack built)」とふくれていく。

「おばあさんと子豚」は、おばあさんが市場へ行って子豚を買ってきたが、子豚が踏み越し段を越えてくれないので、家へ帰ることができない。そこで、おばあさんは犬に子豚を噛んでくれ

るように頼むが、犬はいうことをきかない。そこでおばあさんは棒に犬をたたくように頼む。という風に、次々と火、水、雄牛、肉屋、縄、ネズミ、猫、雌牛に頼んでいく。そして最後に、雌牛に干し草を食べさせると、雌牛はミルクを出し、そのミルクを飲んだ猫はネズミを殺そうとし、ネズミは縄を噛もうとし、縄は肉屋の首を絞めようとし、肉屋は雄牛を殺そうとし、雄牛は水を飲もうとし、水は火を消そうとし、火は棒を燃やそうとし、棒は犬をたたこうとし、犬は子豚を噛もうとして、ようやく子豚は踏み越し段を越え、おばあさんは家に帰ることができたという話である。

どちらの話も、話がだんだんふくらんでいく中で、最初からの部分はほとんど一字一句違えずくり返して語るのが特徴で、軽快なリズムをもったその語りは、意味がわからなくても耳に心地よく響き、幼い子どもでも喜んで聞く話である。

「テレタビーズ」のエピソードの中にもこの累積譚の特徴を生かしたものがある。ひとつは「#60 すべりだいであそぼう」というナーサリーライムの「ヒッコリ・ディッコリ・ドック (Hickory Dickory Dock)」を下敷きにしたエピソードである。

ポーがドームのコントロールパネルのレバーで遊んでいると、ボーンという時計の音が鳴り響く。ポーは面白くなって、何度もレバーをひくと、ボイストランペットが時計の歌を聞かせてくれる。「ちくたくちくたくボーンボーン (Hickory Dickory Dock) ネズミが時計を駆け上がる (the mouse ran up the clock) 1時の時計が鳴って (The clock struck one) ネズミは時計を駆け降りる (the mouse ran down) ちくたくちくたくボーンボーン」という歌である。ポーが歌にあわせてレバーを1回ひくと、ネズミ役のティンキー・ウィンキーが滑り台を滑り上がり、また降りてくる。そうして、次は2時で2回、3時で3回というようにだんだん回数が増えいき、時計が鳴る回数にあわせてティンキー・ウィンキーも同じ回数滑り台を上がったたり降りたりする。(テレビ愛知、1999年11月20日放送)

これも歌を行動でくり返しているエピソードだが、歌の場合はネズミが時計を駆け上がって降りる回数は、時計が鳴る回数が増えても1回である。けれどもエピソードの方では時計の鳴る回数が増えるにしたがって、滑り台の上り降りの回数も増え、最後は8回も上がったたり降りたりするところで終わっている。もともとは累積譚ではない歌をエピソードでは子どもが喜ぶ累積譚風の話につくりかえている。

「#61 おうたでダンス」も同じくナーサリー・ライムの「ヘイ・ディドル・ディドル (Hey Diddle Diddle)」を下敷きにしているが、これも累積譚仕掛けになっている。

ボイストランペットが聞かせてくれた「ヘイ・ディドル・ディドル」の歌にあわせて、ラーラはダンスを踊ることにする。「ヘイ・ディドル・ディドル、猫のバイオリン弾き (The cat and the fiddle) 雌牛が月を飛び越した (the cow jumped over the moon) 子犬がそれを見て高笑い (The little dog laughed to see such sport) お皿はお匙と逃げ出した (and the dish ran away with the spoon)」歌にあわせて跳んだり、笑い転げたり、最後はドームの中をくるくる回る。そこへディブシーがやってきたので、ラーラはそのダンスをディブシーに見せると、ディブシーも踊りたいといって、ふたりで一緒に踊る。今度はティンキー・ウィンキーがやって来て、2人のダン



スを見せたあと、3人で一緒に踊る。最後にポーがやってきて、3人のダンスを見せて、ポーも一緒に踊ろうとするが、ボイストラペットは沈んでしまって、踊りはおしまいになってしまう。(テレビ愛知、1999年11月27日放送)

このエピソードでは、ダンスを踊る人数がだんだん増えていっているが、それに伴って、ダンスの最後でドームの中を回る回数も2回、3回、4回とだんだん増えていく。テレビ放映分では最後にポーが踊ろうとしたところで終わってしまうが、ビデオ「Teletubbies: Nursery Rhymes」(アメリカPBS版)に収められている同じエピソードではポーも一緒に踊ることになっていて、最後には4人でドームの中を6回回っている。このエピソードは典型的な累積譚の手法を使っていて、無条件に子どもが楽しめるものである。

このほかにもビデオ「Teletubbies: Merry Christmas, Teletubbies」の中に、ディプシーがもらったプレゼントのクラッカーを引っぱるエピソードが出てくるが、これも最初はディプシーとラーラのふたりで引っぱるがうまくいかず、次にティンキー・ウィンキーがこれに加わり、最後にポーも加わって4人で引っぱってやっとうまくクラッカーを鳴らすことができる。これもロシアの昔話で有名な累積譚の「おおきなかぶ」の話の思い起こさせるエピソードである。

このように何でもないエピソードの中にも子どもの喜ぶ累積譚の手法を用いていることがよくわかる。

#### 4. その他の要素

以上述べたほかにも、昔話とよく似た表現法が見られるので、簡単に述べておきたい。

テレタビーズたちはそれぞれ、紫、黄緑、黄色、赤とはっきりとした色彩で、アンテナとお腹のテレビ以外に余分なところのない単純な形をしている。昔話では、原色ではっきりとした輪郭のものが好まれる傾向があるが(Lüthi, 1969, 46-50)、色や形の点でもテレタビーズたちは子どもにわかりやすい姿をしているといえる。

また、昔話にはいろいろな不思議な品物(呪具)が出てくるが、それらは難題を解いたり、敵対者を倒したりなど、本当に必要な時だけに使われて、それ以外は忘れられていたり、その存在について全く述べられないことが多い(Lüthi, 1969, 54-55)。「テレタビーズ」でも、様々な品物がどこか遠くから(from far away)突然現れて、消えて行くが、それは子どもたちにとってまさしく他界からもたらされる呪具であり、必要でないとき(それ以外のエピソードで)は全く触れられることがない。こうした点もきわめて昔話的であるといえるだろう。

#### 4. おわりに

以上、「テレタビーズ」に見られる昔話的な特徴について述べてきた。もちろん、「テレタビーズ」は、映像メディアによるテレビ番組であって、昔話ではない。しかし、子どもに受け入れられやすいもの、子どもが喜ぶものをめざした結果、そこに昔話的な特徴が見られるようになっていくことは、たいへん興味深いことである。

昔話はもともと我々が文字を持たない時代から口頭で語り伝えられてきた文芸である。今まで

述べてきたような昔話に見られる語り口の特徴も、口承ゆえ聞き手が物語をイメージしやすいよう、わかりやすいように洗練されてきたものである。そうした明解でひとを引きつけるような様式が、理解能力がまだ未発達な子どもの理解を助けるのに役立っているのだろう。

こうした昔話的な表現方法のほかにも、「テレタビーズ」には、子どもを引きつける要素が詰め込まれている。対象年齢の子どもたちが自分を投影できるような個性的なキャラクターの愛らしさや、テレタビーズたちの家にあるテクノロジー、緑の丘での遊びやダンス、楽しい効果音などである。子どもたちは番組を見ることで、自分たちの世界を再認し、さらに広い世界へ出ていく準備をすることができる。それは、ちょうど昔話が子どもの成長段階にあわせて、生きていく方法を語っている (Bettelheim, 1978) のとよく似ているのではないだろうか。

## 注

- 1 . テレビ東京、テレビ北海道、テレビ愛知、テレビ大阪、テレビせとうち、TXN 九州で放送が始まり、現在はそれに加えて岐阜放送、びわ湖放送、奈良テレビ放送、キッズステーション、テレビユー山形の全 11 局で放映されている。
- 2 . 口承説話は現実世界とは違う独自の「論理」(Logic) を持っていることを、Olrik は指摘している。(Olrik, 138)
- 3 . この「おかのむこうのそのまたむこう」というのは、マザーグースの“ Tom, he was a piper's son ” でもおなじみのフレーズである。(鳥山 60-61)
- 4 . ここに出てくる「tuffet」というのは意味のはっきりしない語である。「三脚の椅子」あるいは「小高い塚」であると解釈されている。番組ではテレタビーズランドの丘にあわせて「丘」と訳したのだろう。同様に「curds and whey」とは乳製品を作る過程で出きるヨーグルトのような凝乳状の食品で昔は子どもがおやつに食べたらしいが、現在ではほとんど見かけないようである。これも現在なじみのある「ヨーグルト」にしたものだろう。
- 5 . Briggs はその *A Dictionary of British Folktales in the English Language* において、民話 (folktales) を昔話 (folk narratives) と伝説 (folk legends) のふたつに大きく分け、さらに昔話を寓話 (fables and exempla) 魔法昔話あるいは本格昔話 (fairy tales) 笑い話 (jocular tales) ノベレ (novelle) ナーサリーテイル (nursery tales) の 5 つに分けている。

## 参考文献

### 書籍 雑誌論文など

Aarne, Antti and Stith Thompson. *The Types of the Folktale*. 2<sup>nd</sup> rev. ed. Helsinki, 1961.

- Bettelheim, Bruno. 『昔話の魔力』波多野完治・乾侑美子共訳 東京 評論社 1978。
- Briggs, Katharine Mary. *A Dictionary of British Folk-Tales*, 4 vols. London, Routledge & Kegan Paul, 1970.
- 稲田浩二 [ほか] 編 『日本昔話事典』 東京 弘文堂 1977。
- Lüthi, Max. 『ヨーロッパの昔話』小澤俊夫訳 東京 岩崎美術社 1969。  
 . 『昔話 その美学と人間像』小澤俊夫訳 東京 岩波書店 1985。
- Orlik, Axel. “Epic Laws of Folk Narrative” in *The Study of Folklore*, ed. by Alan Dundes. Englewood Cliffs, Prentice-Hall, 1965, pp. 129-141.
- 小澤俊夫編著 『昔話入門』 東京 きょうせい 1997。
- 小澤俊夫 『昔話の語法』 東京 福音館書店 1999。
- Teletubbies: Brand Philosophy*. BBC Worldwide [n.d.]
- 鳥山淳子 「マザーグースの散歩道 31」 『英語教育』 vol.48, no.8 (1999年10月号) 東京 大修館書店 pp.60-61.

#### 映像資料

『テレタビーズ』 テレビ愛知 1999年4月～

『テレタビーズってなに』 テレビ東京 1999年7月20日放送

*Teletubbies: Nursery Rhymes*, devised and produced by Anne Wood and Andrew Davenport. (PBS Kids) Burbank, Warner Home Video, 1998.

*Teletubbies: Merry Christmas Teletubbies!*, devised and produced by Anne Wood and Andrew Davenport. (PBS Kids) Burbank, Warner Home Video, 1999.

#### インターネットホームページなど

“Time for Teletubbies” (<http://www.bbc.co.uk/education/teletubbies>) イギリス BBC の公式ホームページ

“Teletubbies” (<http://www.pbs.org/teletubbies>) アメリカ PBS のホームページ

“@nifty:Teletubbies” (<http://www.nifty.com/teletubbies>) 日本の「テレタビーズ」公式ホームページ。

“MIC'S BIG HUG” (<http://home3.highway.ne.jp/mic>) 野ウサギ mic による私設ホームページ

(2000年3月3日 受理)